

手記

シベリア抑留記

北海道 北野 實

北海道小樽市で次男として生まれる。

父、早く死亡し、長男、私、長女、母、四人家族の家庭で育つ。

昭和十年、堺小学校卒業。

昭和十二年、小樽市第一高等小学校卒業、上京就職す。

昭和十六年九月、荒川区役所より東京都荒川区町屋の日本建鉄工業株式会社へ、徴用令により昭和十六年十月十日までに出頭とのことと連絡あり、徴用戦士と

して徴用される。

昭和十八年春、徴兵検査を荒川区役所にて行う。甲種合格す。

昭和十八年、函館連隊区司令部より飛行兵として通知を受ける。

昭和十九年八月、一日付で静岡県三方原中部第九七部隊へ入隊の通知を受ける。

昭和十九年七月、入営のため徴用令を解除される。昭和十九年七月、二十日、入営のため小樽へ帰郷、

身辺の整理をする。

七月末日、町内会の方々、身内の方等の見送りを受け小樽駅より出発する。

昭和十九年八月、一日、浜松駅着、再度電車に乗り中部第九七部隊へ。各地より集まって来ているので混

雑していた。私も呼ばれ、引率の兵について中隊内務班に入る。

被服等を受け取り整理す。儀式用衣服から作業用までであった。軍帽は手箱の上に置いた。初年兵として自覚と心構えを一日も早く慣れるよう心がけなければと思った。

営内は広々として風景等眺めも良く、八月の汐風に乗せて清々しい。営舎内の間はずべて駆け足での行き帰りであった。一月ほど教育を受ける。

満州へ転属のために迎えに来た兵に引率され、夜行列車に乗り下関へ着く。連絡船に乗り釜山港に着く。昼間の航行にて潜水艦等の攻撃もなく大陸の玄関口へ上陸した。祖国を後に初めて見る異境の地であった。貨車に乗り新義州を渡り、鴨緑江の鉄橋を通過する。満州に入り兵站部より食事を受ける。

行く先は白城子という街であることを告げられた。昔、白いキツネがいたのでその名前がついたとのことであった。白城子駅に到着。部隊よりトラックが迎えに来ていた。

固有名 満州第九飛行場大隊

通称名 満州第一六六〇九部隊

部隊は、戦隊、補給、警備であった。

飛行場は広く、自然の主滑走路及び誘導路であった。掩体壕にはベニヤ板製の「隼」が擬態のためか、外にさびしく置いてあった。離着陸する飛行機もなく、ただ吹流しが大空にポツンと風を受け流れている。

満州の秋は早い。夏草も枯れ、秋の気配を感じ、のどかなところである。

前の部隊は沖繩の戦場へ移動したとのことで、総て空兵舎である。時折草むらからウサギが飛び出し、遠くへ去っては振り向いて見ている。

内務班は、一班は初年兵、二、三班は古年兵であった。注意事項の中に、満州の水は硬く生水は飲まないようにと注意があった。必ず沸騰させて飲むようにとのことであった。

昭和十九年十一月頃、古年兵の一部が転属で北支方面へ行くことになった。初年兵は残った。私は兆

南飛行場へ派遣されることになった。防寒被服等冬物が支給された。トラックに乗り白城子飛行場を後にする。兆南飛行場も白城子飛行場と同じで空兵舎である。遠くに満人部落が点々と見える。夏草も枯れ、丘陵から時折ウサギ、キジ等が飛び立つほどのどかな環境であった。

祖国を発ち、早いもので一年を迎える頃となった。家族等、日本での思い出が脳裏をよぎる。これも軍隊生活に馴れたためであろうか。

八月九日早朝、非常呼集を受ける。ソ連軍が日ソ不可侵条約を無視し、突如国境を越え満州へ侵入したのであった。

直ちに本隊より白城子へ帰隊のためトラックが迎えに来た。必要以外の品は爆破し兆南を後にした。白城子の駅周辺は地方人、開拓団の人達で大変な事態であった。満州国軍と行き交う時、すでに我々を見る眼には敵意をうかがうことができた。地方人達は満人等に追われ、集団で集まっているのが精一杯なのである。自宅を出ると満人がマーチョ（車）を使い、満載

にして持ち出している。兵舎・官舎・民家等すべてであった。軍の組織の中では、手を出して助けることも何もできない。このような事態の時こそ、民間人、非戦闘員は早く安全な方策をとることである。

白城子陸軍病院はどうなっていることであろうか、心に残る。

聞きなれない爆音が聞こえ、見上げると上空にソ連の偵察機と思われる赤い星をつけた飛行機であった。何事もなく通り過ぎて行った。

我々は奉天まで南下し、そこで陣を固めるとのことであった。北上組、南下組、また邦人の乗った貨車等、緊迫した空気であった。停車時間中に飯盒で炊事である、思うように行かない。

戦争は人間が人間を殺し合う罪悪である。「聖戦」の名の下に国民を召集し、また他国民を傷つけ、国土を崩壊に導いたのであった。

奉天駅に着く。ここもまた人々の波と切迫した空気で満ちあふれていた。我々は铁路学院という所へ入った。そこで終戦を知る。今まで張り詰めていた気持ち

が抜け落ち、ただただ言葉に表わすことができない。今夜から電燈が使えると思うと何となく気持ちが安らいだ。一步外へ出ると騒然として何の情報もない。トラックに乗って街へ出る時でも満人等から石などを投げられる状態であった。ましてや一人行動は死を意味するものであった。

夜間、我々は銃を持っているので街の警戒等に出ることもあるので、色々と装備等をし、事に備えた。

そのうちにソ連の輸送機が頻繁に着陸し、また飛び立って、本国へ物資、人員、戦利品等を運ぶのであった。

ソ連兵もマンドリン銃を肩にし、時計等金目の品々を略奪に来るのである。女性等は頭髮を刈り、軍服を着た。紛らわしくするためであった。

晴天の日であった、聞き馴れた爆音がしたので思わず上空を見上げると、日の丸の標識を付けた日本の戦闘機であった。と同時に黒煙が上がった。日本軍の飛行機が自爆したのであった。飛行場にはソ連の飛行機が数機着陸していた。乗っていたのは、終戦になって

も、なお軍人精神の旺盛な持ち主の方であった。心から御冥福を祈った。

帰国のために兵器、装備品等差し出すことと指令があり、地図、方位計、小刀等も持つことは禁じられた。将校は軍刀を持つことを許された。日本へ帰国のことであった。私達は軍足、タオル等必要品はできるだけ持った。その品物が満州外、ソ連に入ってから、食料品等の交換物として役に立った。

奉天にて二段式の貨車に乗り満州最前線、黒河へ着いた。対岸はブラゴエンチェンスクであった。冬ともなると川は凍結し、日ソ両国がお互いにスパイ活動をした地点であった。煉瓦の兵舎は砲弾で撃ち抜かれていた。戦闘の跡が随所に見受けられた。激戦の様子をうかがうことができた。

奇しくもこの地に来て、過ぎし八月九日の戦闘で戦死された方々の慰霊を心の中で思いながら御冥福を祈った。

後に乗るブラゴエンチェンスクへ。後には戦利品及び満州国での略奪品を所狭しと積み込んであり、その

上に日本兵を乗せるのであった。十月も近く、岸辺の浅瀬に氷が張っていた。上陸し初めて見る異境の地である。一抹の不安が心に浮かぶ。家屋も人々の服装等も一変した。

先に入ソした人達は幕舎等で野宿の状態であった。所々で煙が立ち上っていた、炊事でもしているのか。一週間位、我々も野営する。貨車に乗って東京ダモイというふれこみであったが、嘘であった。このことがソ連邦としての政策の手段であったのである。

各車両毎に一人のカンボーイ（兵士）が乗り込む。彼等も我々を恐れてか、銃を手放さない。

朝になり日の出を見ると西方へ進んでいる。完全に口車にのせられたのであった。しかし、後の祭りであった。

行く沿線は行けども果てしなく続く大地であり、数時間走って停車場のホームのような所が時折うかがうことができる。次の駅まで数時間を要する寒村地帯であった。貨車が停車した時は急いで降り、用便等をする。前列車と同じ線なのか、随所に用便の跡が残って

いた。近くの住民が物々交換のためにパン等を持って交換に来る。缶詰は特に気をつけなければならなかった。歩哨に見つからないように手早く終わらなくてはならない。これも命の繋ぎのためであった。

広い海原のように見える所へ出た。海かと思つたらバイカル湖であった。「日本ダモイ」も完全に覆された。湖の沿線を五時間ほど走った。いかに大きいかうかがいとれる。汽車は一路西へ、今後に不安がつもの。皆、覚悟を決める。すれ違う軍用列車では兵士がアコーデオンを鳴らして大声で歌い、一升瓶を口付けに飲んでいった。勝利者と敗者の差を見せつけられた。勝利を祝っているのであろう。我々は無念でいっぱいである。

ハバロフスク近くで引込線に入った。アムールの流れは洪水のように流れが速い大河である。高い煙突のある大きな建物へ入った。バーニヤ（入浴場）であった。衣服を全部、輪の鉄線に通し滅菌消毒である。シャワーから出ると衣類に付いていた虫は点々と黄色くなって死んでいた。この地は輸送のための中継地で

あるのか、設備が大きい。温まった衣類を着て、やっと悩まされることなく寝ることもできる。

再び貨車に乗り汽車は西へ。行く手には遠く山の峰に白く雪が見える。テンシャンかクンロン山脈かもしれない。その頃になると歩哨も身振り手振りで話しかけるようになった。時には行く先の食物や気候等も知らせてくれた。歩哨の入れ替えもあった。行く先はタシケントという街の名前を知らせるようになった。ウズベック共和国の首都である。引込線で降り三十分ほど歩いた、四方、鉄網で囲まれた捕虜收容所である。四方の隅には歩哨の立つ望楼がある。衛兵所から入り人員の引き継ぎが終わる。完全な捕虜生活の始まりであった。

天と地は、いかなる境遇にあらうとも生きる夢と希望を与えてくれる母である。これからの生活に頑張らなくてはならないと心に誓う。

收容所内には大小の建物が見える。これからの生活の場である。以前いた人達はどこかへ移動したのである。部屋は二段式の板のベッドがある。ペーチカも

あった。ワラ布団と軍の毛布一枚であった。

一週間位営内の清掃等をし、また近くの使役等に出た。ある時、歩哨の官舎と思われる所で仕事をした。

その時、食事を御馳走して下さった。玄関の所に洗面器が手洗いのためか、置いてあった。家族の方は手で食べていた。私にはスプーンを渡された。久し振りに家庭の味を感じた。捕虜という立場でも、人の心は必ず通い合うことができるものであった。

收容所の作業も終わり、二班に分かれラポート、工場行きである。收容所から三十分ほど歩いて引込線まで行く。客車の古い車両であった。また、帰りもその汽車が工場の引込線のある所で待っていた。

工場名は「フルンゼー」「セルマーシ」という二つの工場であった。

作業内容は、各人の前職を生かし就業することであった。機械工、製図工等、色々である。それ以外の人は雑務である。煉瓦工場、掃除、整理等であった。ソ連も、独ソ戦にて工場等は切迫した所まで運営して戦ったと思われる。中に日本製の工作機械が据えられ

ていた。ネームプレートもあった。驚くと同時に、何か郷愁を感じた。

溶鉱炉の中に屑鉄や鉄鉱石を入れ鑄物を造る。それは農機具等の部品であった。春になると、一部の人が工場の外に出て建築の仕事をするようになった。現場近くに穴を掘り、そこへ水を引き運び混ぜ、中に草等を入れ強度を増すためである。平地に砂を撒き、その上へ並べていくのである。雨が少ないので十日もたつと硬くなる。煉瓦が出来上がる。二個出来る型枠を造って、その中へ上からたたきつける。枠を持って砂を敷きつめた所へ持って行き木枠を取る、出来上がりである。

遠くフィンランドより、一両毎に一棟分の建築資材が積み込まれて来る。設計図をたよりに建ててゆく。そのうち二棟、三棟と仕事をするたびに早く出来上がるようになって「ノルマ」も上がる。ナチャニックから「ハラショウラポータ」と言って工場の食堂で昼食をいただくこともあった。また、外の仕事なので通行人、タタール、ウズベック人等からパン、タバコ等を

いただくこともあった。彼等には木材が不足か、小さい板端でも必要なのか、持って行く。歩哨はどこかで休養でもしているのか、気にしないようであった。道路は石畳であった。一輪車でロバに声をかけながら通り過ぎる。少しは自由を取り戻した気持ちになる。

近くの川辺等にカーミン石が、石炭のボタ山のように随所に高く積み上げ集積されていた。この地は春から秋口まで雨が少ない地方であった。米、綿、果物等が採れる。ラクダも道端で綿を背に積むのか、横になっている。道路も石がきれいに敷き詰められている。延々と続くこの道は、昔は西南「シルクロード」へ続くのであろうか、何やらわからぬ言葉で通り過ぎる。

ラーゲルで慰労会があり「戦艦ポチョムキン」「石の花」等の映画を鑑賞することができた。これも帰国のための民主化美化運動の一環であるのか、数年ぶりの映画であった。

カミッシヤ（視察官）が来る時には收容所内を隅々まで清掃する。また、食事も日頃溜め置いた分量を使

い、副食等も盛りだくさんのメニューが用意され出された。革命三十周年のお祝いがあった。

各ラーゲルの競争のためか、美化活動であるプラカード、花壇等、新しく手入れをした。

昭和二十三年春、移動のため、住み慣れたタシケントを後に収容所を出発することになった。入所以来、数々の思い出、生活に夢を託したこの地へ再び訪れることのない日が来た。毎日通った往復の道も、また列車も今日が最後の乗り納めである。

満州よりこの地へ共に着き、生活しながら、事故や病気等で異境の地で無念の死を遂げた方々に思いを致し、御冥福を祈り、この地を後にした。日本の兵士が労働と命を注ぎ込んだタシケントの街である。劇場等、数々の日本兵士の建てた建築物が残っている。

汽車も一路東を目指し進む。戦後三年も過ぎているので入ソの時とは違い順調に進む。毛布一枚、布団一枚の外、身の回りの品物だけであった。今度は帰国できるのではないかと皆も同じように思っている。延々と続く平野を東へと。

途中糧秣を受領す。また、用便等もそのとき済ませる。日本の兵士が作業している。お互いに手を振り合う。極東も近いのであろう。

囚人列車と擦れ違うこともあった。鉄格子の小さな窓が上部にあるだけである。警戒は我々以上に厳しい。軍用犬もいた。

集結地に近いのか、日本兵士も所々で作業している。互いに手を振り合う。待ちに待った「ナホトカ」であった。列車を降り浜辺に整列する。上下のため、人員の確認である。小高い丘では幕舎等が見える。日本兵士の大集団である。帰国のための船待ちなのであろうか。

砂地を踏み、磯の香りを味わう。日本海を目のあたりに見た子供の頃、海で育った頭を思い出す。カモメは自由に大空を飛んでいる。順番待ちか、引込線にある貨物車に入る一週間ほど使役等もなく過ごした。またどこかへ移動するのか、再び貨車に乗り替えた。この貨車はタシケントから乗ったのと同じ様式の貨車であった。再びこれに我が身を託すことになった。朝

方、停車しているので外を見ると霜で先が見えない。空気が非常にひんやりとした。日が昇るにつれ、荒涼とした森林が行く手を暗示するかのよう山に峰が見えて明るくなったので下車し、三時間ほど歩いた。山に入ったので蚊等が皮膚を襲う。収容所に着いた、元日本の兵士がいた所であった。まず宮内清掃及び用便所の穴掘り等々であった。四、五日ほどで終わる。

作業は主に伐採、運搬、木材の貨車積み、線路工事等であった。いずれも慣れない仕事であった。山には、運び出せないで朽ち果て、そのままの物が所々にあった。その中に小刀で死亡した人の名前、年月日が記されてあった。我々もお互いに注意しながら作業する。思わず哀悼の念にうたれる。日本軍健在の時には衛兵が立哨して遺骨を日本へ送り届け家族へ報告するのであったが、今はどうすることもできない。悔やまれる。

収容所での病氣、事故、栄養失調等で、誰見守ることもなくベッドの上で、ローソクの灯が静かに消えて行くような無情にも等しい状態であった。シベリアの

土となる悔恨、推して知るべしである。指を切つて祖国へ持ち帰るということを聞いたことがあったが、果たして届けることができたか、案ずる。

春にヴィヤンキという山に入ったが、その頃は緑も多く、今はもう秋の気配である。ブドウ、キノコ等が豊富にあった。作業の帰りには採つて帰ることができた。また、青大将もおり、頭から尾まで引くと皮はきれいに取れた。陰干しにして食べる。夜は大きなストーブに木を投げ燃やすが暖まらない。寒さが身にしみる。

十月頃と思う。またナホトカへ帰るといふ知らせが来た。この地で越冬でもしたら病人、事故死等の死者が出たことと思う。幸いにもナホトカへ帰ることができた。春とは違い静かな町になっていた。また浜辺に並び人員点検である。入江の海であるが日本海である。カモメが鳴きながら飛んでいく。今回こそ帰国の船に乗れると思つて喜んで来たが、またしても船便がなく収容所入りであった。また建築作業であった。帰国のために奥地からの到着列車が通る。我々の作業し

ている横を元氣よく通って行く。お互いに手を振り合
い、励まし合う。三階建てのアパートが出来上がり、
入所することができた。今年の冬は暖かい所で越すこ
とができる。先輩に感謝する。当地は集結地で民主教
育が盛んであった。マルクス・エンゲルスの著書や
『日本新聞』『共産党史』等の本があった。これらも赤
化運動の一環であった。勉強会で何らかのテーマを示
して討議し合うのであった。時には吊るし上げ、自己
批判等もあった。

ナホトカはさすがに冬は寒い。トラックに乗り遠く
へ作業に行く。朝などは風も受け、鼻の上などは凍る
ようになる。手で温める。最終便の船も終わった。春
を待つのみであった。

作業の行き帰りには労働歌等を歌った。寒さも飛ん
で行くようであった。車はアメリカ製であった。食料
は集結地のせいかな定して、品々も多様であった。黒
パンはタシケントよりは味が落ちるようであった。

六月頃になると帰国の話が始めるようになった。
夢にまで浮かんだ帰国のためのラーゲル入りの時が来

た。持って行くことのできない物の注意等の話があっ
た。今となっては何一つ必要な物とてない。体一つが
一番大切であった。

帰国の朝を迎える。物品検査を受ける。帰国の列に
入ることができた。この時頭に去来するものは今まで
の苦勞で、それも喜びに変わった。軽い足取りであっ
た。終戦直後のことを思うと天と地の差であった。今
は帰国という目的があるからである。

乗船のための上り坂も弾みがちになる。岩壁には四
年間見ることのなかった日章旗が風を受けてはためい
ていた。船は三千トン級の戦標船であった。船首に
「永徳丸」と書いてあった。タラップを一步一步上っ
た。船倉に落ちつく。皆の顔が初めて安堵の顔にと変
わってゆく。収容所または労働に行く時に歌った色々
のことが頭の中をかける。

先鋒

面を上げよ 前を見よ
怒りに燃えた 人民の
意志に真理を 連ねつつ

あゝ沿海の天を突く 先鋒我等

鉄の兵士

船は出港の合図の汽笛を鳴らし、ナホトカの入江を滑るように静かな船出であった。タグボートも汽笛を鳴らし別れを告げる。

帰国の遅れた戦友達の一日も早い帰国を祈らずにおられない。外海に出ると船足も一段と速度を上げる。

途中で今年度の第一船であった「興安丸」の折り返しの運航に会った。第三船目であった。船の中央には赤字のマークが見える。互いにドラの音を響かせて通り過ぎる。一層船足も上げる。波も穏やかであった。

遠くに見える日本の山々。近くになるにつれ松の緑も青々と、五年ぶりに見る山河の姿であった。「国破れて山河あり」。船内で一泊し三十日の上陸である。出迎えの方々は日の丸を千切れんばかりに振って迎えてくれた。復員の手続きも終わり自宅へ電報を打った。母の喜びが目に浮かぶ。

舞鶴駅より東日本回りで帰る予定が京都駅にて急に変更になり、駅前にて「デモ」「座り込み」等をした。

夜まで警察官等と復員兵との間の混乱であった。今思っても何のためであったのか。

その時の心境は、今は過去の語り草である。結局、東海道線で上野駅回りに変更になった。ナホトカにいた頃に聞かされたことが現実となった。車窓より眺める富士山は日本を代表する秀峰である。いつ見ても美しい。

思い出の上野駅である。さすがに大都会である。乗客等で人の波である。日本共産党の方が旗を持って迎えに来ていた。数班に分かれ、近くの工場等へ帰国を兼ねて何か報告とのことで、三十人単位で引率され、それぞれ出発した。

私は船橋市の日本建鉄工業株式会社に行った。戦前、徴用工として仕事をしていた会社であった。偶然の引き合わせであったのか、元の職場に残っていた方々とも面会できた。帰国を喜んでくれた。今は自動車造りである。東北方面より幼年工として働きに来ていた人達は故郷に帰ったとのことであった。会場が整えてあったので、二、三人が「ソ連邦」での生活等を

報告した。再び代々木の党本部へ引率されて行った。

この繋がり縁になったのか、自宅へ帰ってからも党の方が訪ねて来るようになった。

上野駅の中で復員兵士が帰って来るのか、旗を立てた出迎えの人たちも見られた。青森行き列車に乗り込む。東北本線で小樽へ向かう。各駅で下車するので仲間も少なくなっていく。青森駅へ着く頃になると一層少なくなっていく。

青森より連絡船に乗る。入隊の時に渡った津軽海峡である。生きて再び渡ることのできた喜びをかみしめた。当時の面影が汐風と共に遠ざかった。函館棧橋も目の前である。昭和十九年八月一日入営以来の北の大地への一步を踏んだ。車窓から見る景色は青々と緑の緑の色であった。

小樽駅へ着く頃は四、五人になった。改札を出る。入営時とあまり変わっていない。初めて帰国し古里へ帰った実感であった。生きて帰った者のみが知る喜びであろう、感無量であった。

町内の方々、家族、知人等迎えに来ていた。集まっ

た方々から「抑留等のお話を」と言われたので報告をすると、お礼の言葉をいただいた。また共産党の方も来ていた。

休養している時に訪ねて来られる方がいた。まだ帰って来ない方の家族の方であった。終戦よりナホトカまでの戦後の状態等について、知っている通りのお話をし、また慰め、力づけた。

二カ月ほど休養し、就職のため知人を訪ねた。住友石炭鉱業株式会社小樽営業所築港現場事務所へ就職することができた。戦後の黒ダイヤ景気である。山元より毎日数本の石炭列車が到着した。

次第に、石炭より少量でもエネルギーの高い石油の時代へと変わっていった。手の打ちようがないその頃、山元にいた方が北海道電力小樽支社へ勤めていたので職を紹介して下さった。現在の小樽支社である。昭和六十三年まで勤めた。その時、北電の方はNHK小樽支局へ一年ほど勤めた。小樽支局が札幌へ引っ越した後も三カ月ほど勤めた。

私達は戦争の体験者として、若い世代の人たちに語

り伝えなければならぬ。そのことが亡き戦友に捧げる最大の今できる私の仕事である。歴史は繰り返すと申しますが、戦争は二度と起こしてはならない。

日本の地に二度と帰ることのできなかった戦友、この大戦で亡くなられた方々の霊安らかなることをお祈りし、また帰還された方々の御健康を祈願して、抑留記といたします。

【執筆者の紹介】

現役軍人としては関東軍の一員として活動し、昭和二十年、旧奉天市で終戦を迎えられています。

平成六年、北海道シベリア慰霊碑建設、及び以後の慰霊祭に毎年出席協力されましたし、平成十一年七月、小樽市で初めてシベリア抑留関係展示会開催に当たり、シベリア抑留関係実行委員として活躍されました。

(北海道 安田 忠雄)

知られざるシベリアを語る

北海道 澤田 清吉

昭和二十年、日本は長い間続いた戦争に敗れた。南洋の諸島にいた多くの日本将兵たちは武装解除のあとほどなく、日本に帰還してきた。ポツダム宣言の趣旨の通りである。

しかし、旧満州、北朝鮮、樺太、千島にいた将兵並びに民間人の六十万人余りは、ソ連に強制抑留され、飢餓と酷寒のシベリアに、軍事奴隷として酷使されたのである。

私は、昭和十九年四月、宗谷要塞重砲兵連隊に臨時召集を受け、入隊三ヵ月後に、樺太西能登路岬に駐屯する第二中隊に配属され、北海道と樺太を結ぶ稚泊連絡船の航路の安全確保と援護、宗谷海峡から日本海に侵入せんとする、特に敵潜水艦の阻止、捕捉撃滅を目的として、昼夜を問わず任務に就いていたのである。